

2022年横浜ナザレン教会・三位一体後第九主日(8/21)礼拝

「神の約束」

使徒言行録第6章12節から第7章8節

【聖書】

使徒言行録6:12 また、民衆、長老たち、律法学者たちを扇動して、ステファノを襲って捕らえ、最高法院に引いて行った。13 そして、偽証人を立てて、次のように訴えさせた。「この男は、この聖なる場所と律法をけなして、一向にやめようとしません。14 わたしたちは、彼がこう言っているのを聞いています。『あのナザレの人イエスは、この場所を破壊し、モーセが我々に伝えた慣習を変えるだろう。』」15 最高法院の席に着いていた者は皆、ステファノに注目したが、その顔はさながら天使の顔のように見えた。

7:1 大祭司が、「訴えのとおりか」と尋ねた。2 そこで、ステファノは言った。「兄弟であり父である皆さん、聞いてください。わたしたちの父アブラハムがメソポタミアにいて、まだハランに住んでいなかったとき、栄光の神が現れ、3『あなたの土地と親族を離れ、わたしが示す土地に行け』と言われました。4 それで、アブラハムはカルデア人の土地を出て、ハランに住みました。神はアブラハムを、彼の父が死んだ後、ハランから今あなたがたの住んでいる土地にお移しになりましたが、5 そこでは財産を何もお与えになりませんでした、一步の幅の土地さえも。しかし、そのとき、まだ子供のいなかったアブラハムに対して、『いつかその土地を所有地として与え、死後には子孫たちに相続させる』と約束なされたのです。6 神はこう言われました。『彼の子孫は、外国に移住し、四百年の間、奴隷にされて虐げられる。』7 更に、神は言われました。『彼らを奴隷にする国民は、わたしが裁く。その後、彼らはその国から脱出し、この場所でわたしを礼拝する。』8 そして、神はアブラハムと割礼による契約を結ばれました。こうして、アブラハムはイサクをもうけて八日目に割礼を施し、イサクはヤコブを、ヤコブは十二人の族長をもうけて、それぞれ割礼を施したのです。

1 ステファノの弁明

ステファノは不当に逮捕され、最高法院に引き出され、議員たちによる裁判を受ける事になります。いったい彼はどのような罪を犯したのでしょうか。ステファノを陥れようとする者達は、次のように主張します。「イエスを信じるこやつは、イエスがそうしようとしたように、我々ユダヤ人たちが大切に守って来た祖先からの信仰、つまり、律法と神殿を破壊しようとしている。」しかし、それは全くの誤りです。主イエス・キリストの在り方にこそ、神の民イスラエルが信じて来た神が真の姿が現れているのですから。この事を弁明するために、ステファノは、アブラハムから始めて長い説教をします。使徒言行録の中では最も長い説教です。これほど長くステファノに語らせるのも、作者であるルカや彼の属していた教会が、「我らの主イエス・キリストにこそ真の神が現れている。だから、イエスをキリスト、神からのメシアと信じ

る信仰は、旧約聖書のアブラハムやモーセの信仰を正しく受け継ぐもの」と言う事を、確実に後の世代に伝えたかったのだと思います。

ですから、教会は旧約聖書を、自分達の言葉と行いの規範とする書物—「正典」から外しませんでした。これは当たり前の事ではありません。現代でも、「新約聖書は、神様の愛がよく分かって大好きだが、旧約聖書は怖くて好きになれない。旧約聖書に描かれている神は、裁く神、怒る神、嫉妬する神だ。」という言葉が聞かれます。実は私自身も教会に通い始めた当初は、そんな風に考えていました。礼拝に参加し続け、聖書研究会等で色々と教えてもらって、その思いは変えられました。

人間の考える事、本質的にはあまり変わらないのでしょうか、古代の教会でも、現代と同じように旧約聖書を否定する人々がいたようです。代表的な人で名前が残っているのは、マルキオン。紀元後二世紀、ローマで活躍した人物のようですが、彼は、「旧約聖書に描かれている神は、神ではない。教会の正典は、ルカ福音書とパウロの手紙だけで十分だ」と主張しました。当時、彼の意見に追従した信仰者も多く、マルキオンの教会は大きな勢力を誇っていたそうです。しかし、大半の教会は旧約聖書を自分達の正典として受け入れ、信仰の規範の書として大切に守って来ました。どちらが正しかったのか、は歴史がはっきりと語りません。マルキオンの教会は時のはざまに消えていきました。

「十字架に架けられ死んで葬られ三日目に甦えさせられたナザレ人イエスにこそ、旧約聖書に描かれた真の神が現れている。」これこそ、教会に最初から与えられた信仰です。先週の礼拝では、第七章の2節から5節までで語られるアブラハムの旅立ちに、4000年の時を超える唯一の神への信仰のエッセンスを見ました。今日は、アブラハムに子孫の祝福を約束する御神の姿に見えて来る主イエス・キリストに目を凝らし、聖書の物語に耳を傾けていきたいと思います。

2 インマヌエルの主

さて、ステファノは随分とはしょっていますが、創世記を読んでいくと、神が幾度もアブラハムに語りかけておられるのが分かります。4節から5節の「神はアブラハムを、彼の父が死んだ後、ハランから今あなたがたの住んでいる土地にお移しになりましたが、ここでは財産を何もお与えになりませんでした、一步の幅の土地さえも。しかし、そのとき、まだ子供のいなかったアブラハムに対して、『いつかその土地を所有地として与え、死後には子孫たちに相続させる』と約束なされたのです。」は、創世記第十二章に描かれたものです。次の6節から9節は、創世記第十五章に描かれている神の約束です。この間、十二章から十五章の間、アブラハムとその家族の上には様々なことが起こります。飢饉でエジプトに逃げた時、アブラハムは妻サラを妹と偽ってエジプトのファラオのもとに差し出すような失敗をしてしまい、神に助けられます。又、アブラハムは甥のロトとずっと一緒だったのですが、ロトの羊飼いとアブラハムの羊飼いの間で諍いが生じた事によりロト一家と別々の道を歩むようになります。

その時も、豊かな土地をロト一家に譲ったアブラハム一家は、神に導かれ、カナン地方のヘブロンにあるマムレの櫛の木のもとに落ち着き、主のための祭壇を築きます。その後、カナン地方の王たちの戦いに巻き込まれたロトたちを助けたアブラハムは、サレムの王でありいと高き神の祭司であるメルキゼデクに祝福される、という事もありました。

これらの出来事から、アブラハムが完璧な信仰者ではない、という事が分かります。彼は何度か失敗しています。しかし、神は常にアブラハムと共にいて、窮地にある彼に進むべき道を示してくださるのです。「必ず共にいる御神」こそ、私たちキリスト者に対する主イエス・キリストの在り方です。マタイ福音書では、聖霊によって神の独り子がマリアに宿った事をマリアの婚約者・ヨセフに告げる場面の後で、次のように記されています。「このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われたことが実現するためであった。『見よ、乙女が身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。』この名は、『神は我々と共におられる』という意味である。」(マタイ1:22~23)。まさに、人となりたる神の御子イエス・キリストにこそ、旧約聖書が描く「我々と共におられる」神の在り方を徹底した、と言ってよいでしょう。創造主である神と等しいお方が、在り方を変えてまで私たちと共にいる者となってくださったのですから。

3 片務契約、一方的な恵み

さて、このように、失敗しつつも、神に祝福され、道を示され、神と共に歩んでアブラハムは、様々な経験をします。神と共に行く経験が、アブラハムを信仰者として、人として成長させていきます。そんな神とアブラハムの交わりを、両者の対話として創世記は生き生きと描きます。創世記第十五章に記された神とアブラハムの対話を見ていきましょう。神の言葉が幻の中でアブラハムに臨んだ、と創世記は語ります。「恐れるな、アブラハムよ。私はあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きいであろう。」しかし、アブラハムは、答えません。「我が神、我が主よ、わたしに何をくださるというのですか。ご覧の通り、あなたは私に子孫を与えてくださいませんでしたから、家の僕が後を継ぐことになっています。」アブラハムが完璧な信仰者でない事がよく分かる言葉です。彼は、「あなたの子孫にこの土地を与える」という神の約束を信じようとしたでしょう。しかし、何年たっても、子どもは産まれません。自分も妻サラもおいていくばかり。「私はあなたの約束を信じ切ることができません」とアブラハムは正直に神に語りかけ、神と対話しています。その時、神はアブラハムを天幕の外に連れ出し、満天の星空のもとと言われます。「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。あなたの子孫はこのようになる。」「アブラハムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。」と創世記は語ります。満天の星空を仰ぎ、「ああ、この星々を置いたのも全て、神の御手の業。その神が私に語りかけ、約束してくださる。神の約束を信じよう。」とアブラハムは思ったのでしょう。神はこのアブラハムの思いを正しいもの、神を神とする人間の正しい在り方だ、と認め、喜ばれました。

更にアブラハムと神の対話は続き、彼は次のように神に尋ねます。「わが神、主よ、この土地をわたしが継ぐことを、何によって知ることができましようか。」なんという大胆さ、自由さでしょう。創造者であり絶対的力を持つ神に、被造物に過ぎないアブラハムが約束の保証を求めたのですから。主なる神は、このアブラハムの願いに答えてくださいます。「三歳の牝牛と、三歳の雌山羊と、三歳の雄羊と、山鳩と、鳩の雛をわたしのもとに持ってきてなさい。」現代世界に生きる私たちにはこれだけ聞いて、神が何をなさろうとしているか、さっぱり分かりません。が、アブラハムには分かったのでしょう。彼は、命じられたものを持ってくと、真つ二つに切り裂き、それぞれを互いに向かい合わせて置きます。やがて日が沈みかけたころ、深い眠りに襲われたアブラハムは、その中で主が次のように、アブラハムの子孫の将来について語るのを聞きます。ステファノが6節から7節で語った内容です。『彼の子孫は、外国に移住し、四百年の間、奴隷にされて虐げられる。』更に、神は言われました。『彼らを奴隷にする国民は、わたしが裁く。その後、彼らはその国から脱出し、この場所でわたしを礼拝する。』

日が沈み、完全な暗闇があたりを覆った頃、突然、煙を吐く炉と燃える松明が二つに裂かれた動物の間を通り過ぎた、と創世記は語ります。古代中近東では、二つに裂いたいけにえの間を通るのは、契約を誓う儀式でした。「もし、この契約が破られたら、このいけにえのように二つに裂かれても仕方ありません」と誓うのです。そして、「煙を吐く炉と燃える松明が通り過ぎた」というのは、主なる神が通り抜けた、事を示します。ここで私たちは、はっきりと知らねばなりません。二つに裂かれた動物の間を通ったのは、どちらかであったか、神であったか、アブラハムであったか。

主なる御神だけが通り抜けました。アブラハムは通っていないのに。通常、契約というと双方が義務を負うものです。これを「双務契約」というそうです。双方が義務を負うから。しかし、ここで「約束を破れば二つに裂かれても構わない」という義務を負ったのは、主なる神だけ。天地万物の造り主である主なる神が、一方的に義務を負う約束をしてくださった、難しい言葉で言えば、片方だけが違反した際の責務を負う「片務契約」。主なるみ神のみが義務を負い、被造物であるアブラハムは義務を負わないでよいのです。私たち人間が思い浮かべる「神」は違います。ご自身の全知全能の力を背景に人間を支配し、人間が神の掟を守らねば罰する、それが神だと私たちは考える。しかし、実際は全くの逆でした。神のみが責任を負う、と誓い約束してくださったのです。

そして、この約束は実現します。全知全能の神と全く等しい方がその身を十字架に裂かれたのです。イエス・キリストの十字架。しかも、契約の義務を破ったのは神ではありません、アブラハムとは違って、彼の子孫たちは、真の神を神とできなかった、律法や割礼を守っていればいい、神殿祭儀を守っていればいい、そうして、形式だけ守って、その実、真の神に従って生きようとはしなかった、自分達を神として、神なしで生きようとしていた。裁かれるべきは人間でした。しかし、神は人間の代わりに、ご自身の独り子を裁かれ、その身を裂きました。全知全能の神、何ものにも縛られない、制限されない自由なお方が、一方的に、「約束

が破られたら、この身を裂いても構わない」と一介の被造物に過ぎないアブラハムに約束するなんて、誰が考えるでしょうか。しかし、それ以上に考えられない事が起こりました。ご自身の過ちではない罪、つまり、人を愛する御神なしで生きようとする罪を肩代わりし、神の独り子が実際にその身を裂く、そうまでして人間を救おうとされる、まさに神以外、なさることができない業です。神はそれほどまでに、私たちを深く徹底的に愛される方。旧約聖書が描く神の姿は、十字架と復活の主イエスに鮮烈に徹底して現れています。

4 割礼は条件ではない

さて、神とアブラハムの話は続きます。神はこの片務契約の後、アブラハムが99歳の時、彼に現れて、神と神の民の間の契約の徴として、割礼を命じ、次のように仰います。「わたしの契約は、あなたの体に記されて永遠の契約となる」(創世記17:13)。つまり、それぞれの体に刻まれる神の約束の徴が、割礼。神の救いの約束―「神が一方的に義務を負う契約を、確かに受け入れ救っていただく」との契約証書に印鑑を押すこと、それが割礼である、と言うのです。神の約束が割礼より先です。この順番はとても大切です。神が必ず救ってくださる、という約束を受け入れます、という証印が割礼、「割礼したから救われる」ではありません。

しかし、アブラハムから2000年経った主イエスの時代、ユダヤの人々の多くが「割礼したから救われる」と信じていました。それは、割礼さえ施せば、神の民になれる、そして神なしでも救われるのだ、という考えに道を拓く事となりました。このユダヤ人たちの失敗は、私たちキリスト者にも重要なことを示しています。旧約聖書で言う割礼は、教会では洗礼と言われています。十字架と復活の主イエスを、我が神、我が救い主と受け入れ告白して洗礼を受ける人には、聖霊なる御神が降り、証印が押される、と教会は信じています。しかし、それは、「もう洗礼を受けたのだから、完全な聖い人間になった、神に祈る必要も何もない」という事では決してありません。全く、逆です。洗礼も、割礼と同じく、イエス・キリストによる神の救いが先です。洗礼は、「イエス・キリストの救いを、私は確かに受け入れました」と宣言する事であり、それによって証印としての聖霊が与えられるのです。洗礼が救いの条件ではないのです。この事を疎かに考えていると、私たちは、イエス・キリストなしですまそうとする道へと進んでしまうでしょう。それは、主イエスを十字架に架けた人々が歩んだ道です。同じような失敗をしてはなりません。

5 希望は神に

日本の繁栄の時代は終わり、縮小し衰退する時代が始まった事がコロナ禍で一層明らかになりました。又、戦後77年経ちますが、戦争は絶えず、世界を人の罪が覆い、目をそむけたくなる現実がそこかしこにみられます。しかし、私たちは、その現実恐れ戦き、慌てふ

ためく必要はありません。アブラハム以来、4000年間、信仰者と共に歩んでくださっている神が共にいてくださるのです。人は苦しいことがあると、その事に傷つき罪を犯して、傷つけあってしまいます、そうして試練は呪いとなるのでしょう。しかし、私たちと共にいてくださる神は、試練を正しく耐える道を示してくださり、祝福へと変えてくださいます。その独り子を与えるほどに私たちを愛してくださる方が、約束をたがえることはありません。今がどんなに暗い夜でも、主イエスの十字架と復活は成し遂げられ、既に神の国はこの地上で始まっている、夜は明けようとしているのです。今、見えない主イエス・キリストに生かされ、共に歩むでくださっている事を感謝し、聖霊の御力によってお互いを主にあって大切に思い合いつつ、キリスト・イエスが再び目に見えるお姿で地上にやってくる時を共に待ち望みたい、と切に願います。